

日本、オーストラリア、ネパール文化の中で育つ母性意識

湯 舟 貞 子

Maternal Consciousness Developed in japan, Australia, Nepal Society

Sadako Yufune

豊岡短期大学 論集

第 15 号 別 冊

平成 31 年 3 月 31 日 発 行

日本、オーストラリア、ネパール文化の中で育つ母性意識

Maternal Consciousness Developed in Japan, Australia,
Nepal Society

湯舟 貞子

Sadako Yufune

問題の所在

母性愛については古今東西を問わず、もっとも崇高な愛情として、万人から称えられてきた。崇高な愛情という点については、近年にいたるまで、多くの人々が疑いを持たなかったし、わが国においては、疑いを抱くことさえも罪悪のように思っていた人々が多いと思われる。それは、女性に生まれつき備わっている本能としてとらえられ、男性と比較されてもきた。動物についても、母親になった雌の多くが、子どもを保護し、敵から子どもを守るためにその生命をかけるという行動は、それが本能から生ずるものであるだけに、人間の母親と類似するものとして人々の心を打った。

人間にせよ、動物にせよ、母親としての行動の中で最も人々を感動させるのは、自分の身を犠牲にしても子どもを守るという行動である。死を賭しても子どもを守る行動をあらわすがゆえに、崇高なものとして称えられてきたのである。しかし近年に至って、「母性愛の喪失」ということばがいわれるようになった。それは、子どもを犠牲にする母親が現れてきたことによるものと思われる。自分を犠牲にして子どもの生命を守る母親に対して、子どもの生命をも犠牲にする母親の姿があらわれるようになったことから、「母性愛の喪失」ということばが言われるようになってきたのである。

近年、わが国の社会の中であって子ども虐待は大きな社会問題となっており、児童相談所における相談件数も年々急増している。児童虐待はどのように問題であるのかが意識されにくい、元来この問題は、家庭の中の問題であり、私的領域である家庭に余計な干渉は無用というような社会意識があり、「虐待」というような位置づけはされていなかった。子ども虐待については、米国の小児科医 Kempe, (1962)らが1960年代初めに「被虐待児症候群」(battered child syndrome)として報告したのが最初である。わが国では、1990年前後から、一部の医療関係者や児童福祉関係者に知られていたが、社会的関心が高まり始めたのは、1990年代の後半からである。このような情勢に伴い、子ども虐待に関する調査研究が本格化し、2000(平成12)年には「児童虐待の防止等に関する法律」が成立している。

従来この問題は、貧困家庭や多問題家族など特定の家庭にしか発生しないと考えられてきたが、近年では高学歴・高収入の家庭にも育児ストレスを中心とした虐待が発生してきている(玉谷;1985)¹⁾。従って子どもの虐待はいつでも、どここの家庭でも起こり得る可能性をはらんでいるという認識が必要である。

この虐待状況を少しでも減少させていく為に何が必要なのか、子どもに対する愛情なのか、愛情がありさえすれば、子供は育つのだろうか。虐待事件は、発生件数が増加の一途を辿っているだけでなく、質的にも従来は見られなかったような相談、“可愛いはずなのに愛せない”など恵まれた家庭に生まれ、望んで結婚をし、子どもをもうけ、他人からは幸せな家庭そのものと考えられていたような、ごく普通の家庭の母親からの訴えが増加しているのも事実である。乳幼児期の重要性はErikson(1957)が青年心理の特徴を「自我同一性」という概念にまとめた。これは「母と子の基礎的信頼(basic trust)は生後1年間の母と子の関係によって形成される」²⁾ また、Bowlbyは乳幼児期に与えられる母親の愛がパーソナリティーの正常な発達に重要である³⁾、など母子関係の重要性について強調しており、このようにして育まれた母と子の心理的一体感が、その後の子の母からの自立を容易にするのである。

研究の目的

何故このような虐待現象が起きているのか、その1つに幼少時代から女性を取り巻く社会体制の変動が考えられる。敗戦以前のわが国では、各家庭に、向こう三軒両隣に、そして母子の住む地域社会に、そして子どもの遊びの中にさえ育児があった(代表的なものに“ままごと遊び”など)。ところが敗戦後、特に近年では地域社会の崩壊や核家族化が益々進み、その結果、母性の成熟されるに適した社会環境の中で醸成される機会が失われてしまい、十分な母親としての基盤が形成されない内に我が子の誕生といったのが現状である。

さて、母と子の絆(ボンディング)研究は、先にも述べたように女性なら誰でも生まれながらに母親としての適性を備えているという根強い社会通念を前提として行われてきた。しかし、母と子のボンディングを重視する起源を辿ると、1972年にジョン・ケネルとマーシャル・クラウス(John Kennell and Marshall Klaus)と言う2人の小児科医が*New England Journal of Medicine*に発表した研究から始まっている⁴⁾。彼らの研究によれば、「分娩直後から16時間余分に赤ちゃんとは接触した母親は、授乳時にしか接触しなかった母親に比べて赤ちゃんの世話がうまく、また子どもの方も発達が良好であった。(ダイアン・E・アイヤー 2000:3)」⁵⁾と述べており、この劇的ともいえる結果は、分娩直後、ホルモン分泌の変動が大きい時期が、母親にとっては子どもに対する愛情が最も敏感な時期(感受性)であって、その時期に子どもとどのくらい触れ合うか、即ち本能というよりも、子どもとの接触時間の長さによって、その後の赤ちゃんを受け入れることができるか否かが、決定されることを示

しているという。

ケネルとクラウスは動物とくにネズミとヤギのメスでは、分娩前後の行動が母性ホルモンによって決定されるという研究からヒントを得ている。たとえばメスのヤギの場合、分娩直後にわずか5分間でも子ヤギと引き離されると、その後子ヤギを受け入れなくなってしまうという。これを人間に当てはめると、仮に母親が分娩直後に新生児と引き離されるようなことがあれば、その後における子どもの受容に困難を生じるということになろう。実際、ケネルとクラウスは、この知見をもとに、保育器で育った子どもが虐待を受ける確立が高いのは、出生後、母親から引き離されている期間が長いからではないかという仮説を提唱している。

わが国の出産の歴史を辿ると、「イエ」制度は第二次世界大戦時まで存在しており、子孫をつくり、イエを次代に引き継ぐというわが国の伝統的家族観では、嫁（既婚女性）は「産むことによって一人前の女性、人並み」と評価されていた。自宅で家族に囲まれての出産が多く、人生は結婚して子どもを産み育てることであった時代である。子育ては母親の役割であり、大家族の中で親以外の大人の世話を受けながら、多くの子どもたちが育てられていたのである。

しかし現代では、家族や地域の養育力が低下しており、出産の多くが施設内分娩となり、母性愛の喪失という事がいわれ始め、子どもの側からいえば、母性愛の剥奪という現象が起きはじめています。そしてここ数年、母性愛の喪失といえるような母親の状態や事件が起きており、女性が必ずしも母性本能を持っていないのではないか、かりに本能があったとしても、それが抑圧されたり、愛情へと発達しない状態があるのではないかと考えるようになり、現在は家族の立会い分娩や生まれたばかりの新生児が母親の元で過ごすようになってきた。

合計特殊出生率の低下（2005年は1.26と5年連続で過去最低を更新、2006年に6年ぶりに上昇し、1.3台に回復、これは71～74年生まれの団塊ジュニア世代を中心に結婚・出産が増えたのが主因）現象からも、体験不足によると見られる、わが子を思いやる心や、子どもの為なら自分を犠牲にすることも辞さない心の発達が成立しにくくなっていると考えられる。

母性意識形成の為の重要な要因が、子どもと触れ合うこと、触れ合うことにより子どもを知ることが大切であり、母性意識の発達を促進する重要な要因がこれら養育を含めた教育という機能であり、どのように教育されたかが親として子どもを愛する重要な鍵になると考える。

このように日本における問題提起と共に、文化的背景の違いによって母性意識の形成過程に違いがあるのではないかと考え、オーストラリア人、ネパール人との比較も行った。

研究方法

1. 研究調査の地域概要

1) 日本【岡山県新見市】

新見市は岡山県の西北端に位置し、岡山県の 11.2%を占め、全域が中国山地の脊梁地帯に属するため起伏の多い地形で、86.5%を森林が占めている。産業は農業(水稻を中心にピーマン、夏秋トマト、桃、花卉など)と林業。

この地にある大学の学生にアンケートの協力を依頼する。

2) オーストラリア【ゴールドコーストにあるグリフィス大学】

オーストラリアの東部中央に位置し、南太平洋に面した国際的なリゾート地。ブリスベンからゴールドコーストにかけて6つのキャンパスを持つオーストラリア連邦の公立大学である。

ゴールドコーストキャンパス内で働く大学の先生方や、子育てをしながら学んでいる学生、大学に隣接する教会内の保育所を利用している人、スポーツセンターに通っている現在子育て中の方々からの協力を得た。

3) ネパール【カトマンズ周辺パタン地区】

ネパールの首都カトマンズと周辺のパタン、パドガオンは標高 1350mのカトマンズの谷(盆地)の中心に位置し、それらは世界遺産に指定されている所で、先住民のネワール族によって開かれ王国の一つとして反映し、18 世紀後半に首都となる。この地にあるネパール医科大学のスタッフの方々の協力を得た。

2. 人権の擁護

倫理的配慮として、研究の目的、方法、本研究への協力の有無により、今後不利益が生じないことを対象に説明した。協力の同意を得た対象者に質問紙を手渡し、回答は無記名で返送してもらった。また、不明な点の問い合わせ先を提示した。回答は本研究以外では使用せず、対象者のプライバシーを保護した。

3. 分析方法

データ解析には SPSS160J を使い、有意差検定にはカイ二乗検定を求めた。有意水準は5%以下を有意差ありとし、構成概念の妥当性は主成分分析と因子分析を行い検討。因子分析は共通因子がいくつかあるかを明らかにすると共に、尺度ごとの因子別負荷量をも明らかにし、一群の観測可能な変数に基づいて、直接観測できない因子を識別する。したがって、本研究は「母性意識形成要因」という直接には観測できないであろう複雑な現象を明らかにすることを命題としており、形成要因の基底にある概念を因子で説明できることをねらいとして、因子分析という統計手法を用いた。

4. 本研究の仮説

人間の子どもの場合、生後まもなく外界に向けて開いている器官は皮膚であり、皮膚感覚によって外界を認知する。したがって、どのような刺激が皮膚に与えられるかが重要な意味を持つ。空腹感が満たされる際に快く抱かれるということは、その相手との積極的な関係を持つとしようとする意欲の基盤を作るものと推定される。ここに身体接触の意義が強調される理由がある。

次いで外界に向けて開かれる感覚は聴覚である。まだ目の見えない乳児にとっては、情緒的な音声が刺激となり、それが快いものであれば、その音声を発する人間に対して関係を持つとしようとする。このように、母親の情緒的な皮膚接触や音声がスピッツのいう情緒的な態度といえるものであり、生後半期間はこれらによって人間関係への意欲を強めていく。もし、それらの刺激が不足しているような状況におかれると、関係への意欲が発達しないのである。

一方、母親とは妊娠、出産、育児の経験を持つ、或いは持つとしようとする女性の子供との関係から生まれてくる特性であると考え。また、生物学的、心理学的、文化・社会的な存在として女性性が成熟していくと共に、子供に対する感情、愛、意識、行動が発達する。そしてこの発達する母性は女性が生涯において経験する多くのことや、これらのことから学習し、身につけていく価値観によって、またその時々々の社会環境によって大きく影響を受けるのである。

これらより、母と子の繋がりについて以下の仮説をたて検証を進めているが、今回の3カ国比較では仮説③についてのみ検証する。

- ①. 乳幼児期の体験によって母性意識は影響を受ける。
- ②. 母性意識形成には家族、特に母親からの影響を受けやすい。
- ③. 出産や育児を体験することによって母性意識は高められる。

5. 調査表の作成

母性意識の形成は、幼児期から個人的諸経験を重ねることによって形成され、変容してくると思われる。自らの意思・行動をコントロールし、自立した人間になるためには幼児期に母親(あるいはそれに代わる人)から愛情豊かに、スキンシップたっぷりの関わりが必要となってくる。今回は養育者の生活環境と母性意識との関係を明らかにする。

結果

回答者の「年齢」は、日本人は、20歳代 29人 20.1%、30歳代 76人 52.8%、オーストラリア人は、20歳代 16人 20.2%、30歳代 43人 54.4%、ネパール人、20歳代 202人 56.1%、30歳代 137人 38.0%であり、ネパール人は他の2カ国と比較し回答者の年齢がやや若い傾向にある。

1. 「子供と一緒に過ごす時間」、6時間以上が日本、58人40.3%、オーストラリア46人58.2%、ネパール、315人87.0%と、ネパール人は子どもとの接触時間が長く、日本人は3カ国の中で一番短い。(自由度8、 $P < 0.000$)
2. 次に「子どもと接する時間に対する不安」については、不安を感じている人、日本、62人43.0%、オーストラリア、48人60.8%、ネパール、358人99.4%と接する時間の短い日本人が一番不安も感じていなかった。(自由度10、 $P < 0.000$)
3. 「子どもの成長の満足度」は不満と回答した者、日本16人11.1%、オーストラリア、1人1.3%、ネパール、25人6.9%と日本人は子どもの成長にも満足感を得ていない。(自由度8、 $P < 0.000$)
4. このような考えを持つ人たちの母性意識については、「妊娠は女性にとって素晴らしい出来事である」と答えた者、日本43.8%、オーストラリア50.6%に対し、ネパールは16.6%と妊娠に対する肯定感情は他の2カ国の方が有意に高い結果であった。(自由度5、 $P < 0.000$)
5. しかし、「赤ちゃんを産んではじめてこどもの可愛さが分かる」は、日本人31.9%、オーストラリア人21.5%、ネパール人31.8%と3カ国で差はなかった。
6. 成育過程の中で「小さい弟や妹の世話経験の有無」や「親戚や知人の小さい子どもの世話」では、双方ともにネパール人は1人の無回答を除く全員が経験ありと回答している。

考察

<仮説③>の「自分の子が生まれ、育児に直接関わる経験を持つことによって母性意識は高められる」について、

母性愛を育むには、子どもの頃に小さい弟や妹の世話や、友達と遊ぶ経験によって築かれる人格が影響すると平井信義はその著「母性愛の研究」の中で述べている⁶⁾。しかし、今回の結果ではネパール人は1人の無回答者を除く全員が成育過程の中で世話経験があるにもかかわらず、妊娠に対する肯定感情が日本人やオーストラリア人と比較して低い。これはカースト制度のあるネパール人では結婚相手もカーストの中であり、日本やオーストラリア人のように結婚相手を自由に選ぶことができないこと、またネパール国の紹介の中で述べたように5才未満の乳幼児死亡率が高く、子どもの死に対する恐怖もこの一因ではないかと考える。

心理学者ハリー・ハーロウ(Harry Harlow)が実施した赤毛ザルの実験⁷⁾では、人工保育で育った子ザルには成長して子どもを保護し世話をするという母親らしい行動が見られなかったという報告がある。このように、成長過程の母子の相互作用の中でそれが形成されていくものと思われる。出産を経験する事によって誕生した我が子を見、触り、抱く事によって母性意識が形成されていくものと考えられる。

先に述べたように、母と子のボンディング(母と子の絆)を重視する考え方の起源をたどると、1972

年にジョン・ケネルとマーシャル・クラウス(John Kennell and Marshall Klaus)という二人の小児科医が *New England Journal of Medicine* に発表した研究から始まっている。彼らの研究によれば、分娩の直後から 16 時間余分に赤ちゃんとは接触した母親は授乳時にしか接触しなかった母親に比べて赤ちゃんの世話がうまく、また子どもの方も発達が良好であったという³⁾。これにより、保育器で育った子どもが虐待を受ける確率が高いのは、出生後母親から引き離されている期間が長いからではないかという仮説を提唱している。また、ボウルビィは生まれてから最初の数年間は、一人の人間が子どもの世話に専念する必要があると述べており、母子の絆の重要性に注目し続けた。ボウルビィによると、乳幼児期に愛情豊かな母親または母親に代わる人との間に築かれる温かく持続的な関係を経験する事が最も必要なことであり、子どもの頃的情緒的きずな形成の障害が後年色々な問題を引き起こす原因ともなっている。今回の調査結果から日本人はオーストラリアやネパール人に比較し、子どもとの接触時間が短く、接触する時間の短さについての不安も余り持たずそれでいて子どもの成長に対して満足感も得られていない結果については今後考えていかなければならない課題といえる。

結論

母性意識の発達、『母性意識形成過程の重要な要因として、「子どもが好き」「子どもと共にいると楽しい」』など、子どもと自己との関係において、子どもに対して肯定的・積極的に考えるような人格の形成を中心課題として、母と子の関係、そして日本、オーストラリア、ネパールとの比較をしてきた。その結果、子どもに対して親しみや関心を持つことがどの年代にあるのか、どこに Key 年齢があるのかは分からないが、今回の調査で言える事は自分の子が生まれ、育児に直接関わる経験を持つことが母性意識を高める要因に繋がるという結果を得た。

母性意識は、あるいは本能が関係することも考えられるが、それは動物レベルであって、きわめて複雑な脳の機構を持ち、また複雑な精神構造を持っている人間においては、その形成過程を重視しなければならない・・・という観点に立って今後研究を進めていかなければならない。すなわち母性意識はさまざまな環境の条件によって形成されるものである。とくに、母性本能と母性意識とははっきりと区別すべきものであり、本能が動物レベルで営まれるホルモンに基づく、半オートマティック(automatic) な営みであるのに対して、意識は現在の科学からいえば、むしろ形而上学に属する対象であるという考え方に立つといえる。母性意識を高揚するには、自己犠牲を含めて子どものために自己の欲求を大幅に統制しなければならない要素があり、自分の子どもに暴行を加えたり、子どもを遺棄、殺害するという場合には、周囲の状況や社会背景がどのようなであってもその母親の母性意識の形成は問題にされなければならない。母性意識形成にあたっては、その女性の育ってきた環境について検討する必要があることは当然である。

日本は幼少時代から女性を取り巻く社会体制は常に各家庭に、向こう三軒両隣に、そして母子の住

む地域社会に、そして子どもの遊びの中にさえ育児があった時代から、最近では地域社会の崩壊や核家族化が進んだ日本社会の中にあっては、母性の成熟されるに適した土壌に醸成される機会が失われてしまい、十分な基盤が形成されない内に我が子の誕生といったのが現状である。

加えて合計特殊出生率が年毎に減少し、兄弟姉妹の少ない中で成長していく現代の子ども達にとって、何が一番大切なのかを考えてみると、その1つに義務教育の中で幼い子どもと触れる体験をすること、また老年期にある人との接触や世話経験を持つことによって相手を思いやる気持ちを育てること。2つには、多くの悩みを抱え育児をしている若い母親達が、気軽に相談できる場を設ける事である。

母性の本質は生物学的な存在としての女性の形態や機能よりも、母性行動を操る精神、つまり心理学、文化・社会学的な存在としての女性の子どもに対する意識や感情、愛に求めなければならない。とにかく今回の調査で明らかにできた事は極わずかである。今後、近接学問領域との関係性を踏まえ長期的に考えていきたいと思う。

引用文献

- 1) 玉谷直美. (1985). *女性の心の成熟*(p.85). 創元社.
- 2) Erikson, E. H. (1973). *自我同一性*(小此木敬吾訳編). 誠信書房. (Erikson, E. H. (1971). *Identity and the Life Cycle*. Faber & Faber.)
- 3) Bowlby, J. (1977). (黒田実郎訳). *母子関係の理論・I 愛着行動*. 岩崎学術出版. (Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. Basic Books.)
- 4) Klaus, M. H. & Kennell, J. H. (1985). *親と子のきずな*(p.97)(竹内徹ほか訳). 医学書院. (Klaus, M. H. & Kennell, J. H. (1982). *Parent-infant bonding*. 2nd ed.)
- 5) Eyer, D.E. (2000). *母性愛神話のまぼろし*(大日向雅美他訳). 大修館書店. (Diane E. Eyer. (1992). *Mother-infant bonding*. Yale University Press.)
- 6) 平井信義編. (1981). *母性愛の研究*. 同文書院.
- 7) 河合隼雄. (1999). *母性社会日本の病理*. 講談社学術文庫.

参考文献

- 青木やよひ. (1986). *母性とは何か*. 金子書房.
- Barrett, William. (1981). *実存主義とは何か*(島津彬郎訳). サイマル出版会. (Barrett, William. (1958). *Irrational man*. Doubleday)
- Deutsch, H. (1964). *母性の心理 1 母性のきざし*. 日本教文社. (Deutsch, H. *The psychology of*

women.)

花沢成一.(1992). *母性心理学*(p.32). 医学書院.

石井邦子.(2004). *母性看護学概論 母性看護学*. 医学書院

大日向雅美.(2000). *母性愛神話の罨*. 日本評論社.

Parsons, T.& Bales, R. F. (1970). *核家族と子どもの社会化*(橋爪貞雄訳)(pp.68-69). 黎明書房.(Parsons, T.& Bales, R. F. *Family : socialization and interaction process*)

資料：本研究で用いた母性意識の質問用紙

次に 27 項目の育児や女性に関する質問紙があります。それぞれの意見についてどう思うかを各項目右にある 5 段階のうち、あなたの考えに合うところに○をつけてください。

[5 = 非常にそう思う、4 = そう思う、3 = どちらでもない、2 = ちがう、1 = 非常に違う]

	5	4	3	2	1
1. 妊娠は女性にとって素晴らしい出来事である					
2. 赤ちゃんを産むことができるのは女の特権である					
3. 妊娠した自分の姿は想像するだけでみじめである					
4. 赤ちゃんを産んではじめて子どものかわいさがわかる					
5. 赤ちゃんを無事に産むためならどんな苦しみも我慢できる					
6. 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは不公平である					
7. 女は子どもを産むことで自分の生きた証拠を残すことができる					
8. どんなことをしても赤ちゃんは母乳で育てるべきである					
9. 予定していない妊娠の場合は、人工妊娠中絶もやむおえない					
10. 子どもを産んで育てるのは社会に対する女の努めである					
11. 女は子どもを持つことで人生の価値を知ることができる					
12. 結婚生活を楽しむためには子どもをつくらないほうが良い					
13. 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である					
14. 子どもを産んで育てることは自分自身の成長につながる					
15. わが子を他人にあずけても自分の仕事は続けるべきである					
16. 子どもを産んで育てなければ女に生まれた甲斐がない					
17. 子どもがいることで家庭生活はより楽になる					
18. 育児は妻だけでなく夫も分担すべき仕事である					
19. わが子の成長を見とどけるために長生きをしなければならない					
20. 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である					
21. 育児に追われていると若さが早く失われる					
22. わが子のためなら自分を犠牲にすることができる					
23. 子どもを育てるのは生みの親が最良である					
24. 育児から開放される時に人間らしい自由な生活ができる					
25. わが子の存在を感じるだけで毎日の生活に張りがある					
26. 育児に専念したいというのが母親の本音である					
27. 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのはまちがっている					